

片倉に思う

滝 沢 由美子

我が家では4月末からの連休中に決まって訪れる場所がある。恒例として決めている訳ではないが連休中一日位はどこかに出かけようかとなると、自然とそこへ足が向き、この数年続いている。そこは名所でも行楽地でもなく、ただ、雑木林と農地が広がっているだけの多摩丘陵の一角である。JR横浜線で八王子より一つ目の片倉駅から西へちょっと歩いた所。国道16号を渡ってすぐの急斜面を20m程登ると広い平坦面に出るが、その端に片倉城跡と住吉神社があり、そこは空堀の遺構、芝生の原、藤棚とベンチなどのある公園となっている。我々は行楽の家族連れや若者のグループやらがボール遊びなどをして楽しんでいる姿を眺めながら、この公園を抜けて畑の方へと歩く。菜の花、ねぎ坊主、じゃがいも、にんじん、大根などの野菜や麦の畑がひろがり、お茶の木や高刈仕立の桑が所々に見られる。それらの間を、道端のすみれやたんぽぽをはじめとする色々な、雑草と一言で片付けてしまうには申し訳ない程かわいらしい若葉や小さい花をつけた雑草を一つ一つ眺めたり、スギナやオオバコなどで遊びながら歩く。ここには未だ、関東たんぽぽが西洋たんぽぽに駆逐されずに残っている。更に西に続く標高約140mの平坦面上を歩いてから南に下ると小さな谷に出る。北流して来て片倉駅のすぐ北で、浅川の支流の湯殿川に合流する兵衛川の支谷である。斜面はほとんどカンなどの雑木林、竹、クマ笹などでおおわれ、伐り払われた日当たりの良い所には金ランやタツナミ草、一人静など、谷に降りると葛、オレンジ色のきれいなクサボケ等々、武蔵野で良く見られる花々があちこちに咲き乱れている。谷底の幅は15m前後、幅1m程の小川が流れている。深い所でせいぜい50cm、コンクリートなど全く無く、底には落葉が積もり足を入れると一時濁るが間もなく清流となる。メダカ、オタマジャクシ、ドジョウ、アメンボ、ヤゴなどがある。中でも特筆に値するのは川ニナが沢山いるのである。ということはホタルの棲む場所かも知れない。手足泥まみれで喜々としている子供達を眺めながら、私は手近にあるヨモギやツクシを

摘み、ツジュウカラやアオジなどの小鳥のさえずりに混じり時折聞こえるキジのケーンケーンという声に耳を傾け、春を満喫するのである。帰りは谷の南側の丘陵上に出、サンショ、タラの芽などを採りながら帰途に着き、帰宅後もまたまた春の味覚を楽しむのである。

まさに多摩や武蔵野の自然、山の中や河原の自然とは全く異なった、人里の落ち着いた自然である。現在では農村地域でも、これ程自然の息吹が感じられる所は少ないと思われる。こんなにも自然界の生きものが、のびのびと育っている場所が都会のこんなに近くに今もってあるとは、最初訪れた時信じ難い程であった。そして暫くしてその理由が解ったのである。谷底に棚田の畔跡を見、斜面の所々や畑の角などに金属ラベルの付いた杭が穿たれているのを見て、住宅団地用に既に買収された土地であり、人間の生活がこの地域にかかわらなくなって急速に、自然界の生きもの達ののびのびと復活したのだとわかったのである。一昨年には住居址が発掘されていたのを目にしたが、ここではこのような自然の中で、田畑を開き雑木林から燃料や堆肥、木の実や山菜などを得る暮らしが昔から続けられて来たことであろう。それは、人間の歴史から見ればつい最近まで、少なくとも農業が普及し、機械化が進み、生活が全体として便利にそして忙しくなる前までは続いていたであろう。便利さとは人間の本質に何をもちたらずのであろうか。身近な家事一つとっても、次々に登場する便利な機械や道具は生活者としての人間の能力に確実に変化を与えている。一昔前の主婦に普通にあった家事能力の一部は、今の若い世代には無い。その代わりに我々は何を身につけたのだろうか。生産性の向上は最優先に置かれるべきものなのか、根底に国土計画の考えのない開発ばかりの日本はどのようになるのだろうか等々、その場所はかつての豊かな自然を垣間見せてくれながらも、種々の事を私に考えさせてくれる。昨春は、いよいよトラック用の道路が造成されていた。近い将来確実に、あの素晴らしい自然が全て消えてしまうとはたいへんに残念である。